

たとえられ。つまり、父左大臣の期待、あるいは宰相中将が女君を女姿にしたことから分かるように、この物語の社会は性別における「規範」という圧力を人々に向け、そしてきょうだいもまたそれに強迫され続けていたのである。

おわりに

『とりかへばや』という物語は、きょうだいの身体的性別以外の個性を認めず、あくまでも交換可能な存在と位置づけ、これを受け入れない存在（女春宮）は物語の外へと排除した。このように、きょうだいの個性を認めないということは、二人に向けられる愛を非常に曖昧なものにし、愛が仮構されたものでしかなくことを示唆している。また、きょうだいは最終的にこれ以上ないほどの栄華を極めることになるが、このことは逆に、誰も身体的性別からは逃れられないということを強調しているのではないかと考える。

身体的性別は強迫観念のようなものであり、社会に身を置く人間は性別の「規範」のもとづく期待を有しており、知らぬ間にそうした期待を内面化してしまっているということを、この物語は皮肉まじりに語っているのではないだろうか。

宇治十帖という物語社会の論理

——『源氏物語』宇治十帖の
「物語社会—学」的研究

岩 田 行 展

目 次

〇、はじめに

一、「世づかぬ」女たち

1 正篇における「世づかぬ」——若紫、末摘花の場合

2 宇治十帖における「世づかぬ」——大君、中君の場合

3 「世づかぬ」浮舟

二、「世づかぬ」行為としての「足をさし下ろす」こと

1 玉鬘の足——歩く足／歩けない足

2 変容する周囲の足

3 浮舟の足——歩けない足／さまよう足

三、生き方としての「世づかぬ」

『源氏物語』研究史において「宇治十帖」は、いわゆる光源氏の物語である〈正篇〉に対して、光源氏亡き後の物語Ⅱ〈続篇〉と位置付けられてきた。この〈続篇〉ということばが端的に示すように、続きの物語として、〈正篇〉に付属しているものとして扱われてきたと思われる。

たとえば、葛綿正一によって提出された宇治十帖研究史に対する

批判は、「光源氏の物語を判断基準として宇治十帖を「喪失」や解體といった否定的な形でしか規定できない」ために「宇治十帖のもつ肯定的な動きを捉え損なっているのではないか」というものであったが、本稿はその主張に肯定的な立場をとり、正篇の〈読み〉はあくまで補助線として扱い、宇治十帖の〈読み〉を確立すると同時に、宇治十帖（というテキストあるいは物語社会）とは何かを解明することを目的とする。

「一、「世づかぬ」女たち」では、まず正篇における「世づかぬ」女の例として若紫（のちの紫上）と末摘花を扱い、その分析を補助線としながら、宇治十帖における八の宮、大君・中君、そして浮舟をめぐる「世づかぬ」有様について分析する。

若紫が「世づかぬ」と語られるのは、世間一般のわきまえを会得していない幼さに起因するものであり、末摘花が「世づかぬ」と語られるのは、男からの援助・贈与によって「世づく」契機を見いだす邸や暮らしぶりを強調するものである。しかし、宇治十帖においてはもはやそういった類の有様を語るのではなく、生き方を規定する論理（基準）として「世づかぬ」ということばが物語社会に深く根ざしている。たとえば、大君・中君は同じように「世づかぬ」と扱われてきたが、大君は「世づかぬ」まま生涯を閉じる一方、中君は「世づかぬ」者から「世づく」者へと変わっていったというように、全く正反対の生き方を歩んだことを言い表す語として「世づか

ぬ」がある。

一方、浮舟の「世づかぬ」姿が語られるのは失踪直前から、それまでは「世の中」に対する不平不満はあっても「世づかぬ」と語られることはなかった。少なくとも、浮舟の「世づかぬ」有様が問題になるのは、失踪直前から以後のことなのだ。また、失踪前に「世づかぬ」と語るのは浮舟自らであり、周囲から「世づかぬ」と批判されるのは全て小野においてのことである。だとすれば、自殺が未遂に終わり、生き長らえることを余儀なくされた浮舟は、「世づかぬ」身であることを周囲の人間に認識させることを戦略的に行うことで、自らの身体を確立させているのではないか。一見、その場凌ぎを行っているだけに過ぎない浮舟の「世づかぬ」態度は、男に頼るわけでもなく、周囲の人々に頼るわけでもなく、仏道に頼るわけでもなく、ただ「ありし世」での経験を基準としたものののだ。つまり、浮舟は「世の常」に抗い続けることで「世づかぬ」要素を自らが生み出し、世との没交渉Ⅱ「世づかぬ」ことを達成したのであって、周囲に「世づかぬ」と認識させることこそ、この世で浮舟が生きていく方法であったと考える。

「二、「世づかぬ」行為としての「足をさし下ろす」こと」では、浮舟自身による記憶語りの中で、どこに住んでいたのか、自分の名前が何であったのかを覚えていない（思い出せない）としながらも、足を簀子の端にさし下ろし、これからの行く末を悩んだことを思い

出していることに注目し、浮舟の足の解明、さらには物語社会における足とは何なのか、語られる意義とは何かを問題として設定し、分析を試みる。

簀子の端からさし下ろした、今にも地に着こうとする浮舟の足は、過去現在から逃走しようとする緊張関係を物語っているのだが、「抱かれる」ことでしか移動できない浮舟にとって、もはや自らの足であなたへと踏み出すことはない。踏み出そうとしても踏み出せないというよりも、抱かれて移動したいという願望が剥き出しになり、簀子という境界領域（「この世」）にとどまり「足をさし下ろす」ことしかできないのである。浮舟の足は歩かない、歩けない足として語られていると言えよう。「簀子の端」で浮舟が自らの足を浮遊させたのは、まさに「中空」をさまよう自らの心体を象徴しているのである。

玉鬘は歩いたが、浮舟は歩かなかった。それぞれ右近の足との関係で把握するならば、玉鬘は再会の足、浮舟は別離の足と言えよう。死を決意しながら、この世にとどまることを選びとった浮舟にとっては、少なくとも現在の環境から逃走しようとする想いを具体化したあなたへの一步だったということができるだろう。常識的には簀子に女が出ることさえ有り得ないにもかかわらず、浮舟は足を露出させたのである。それは「世づかぬ」浮舟を象徴する行為であり、「この世」に対するささやかなる抵抗であったのだ。現在の環境から新たな環境へ向かおうとするとき、足は重要な機能を果たす。し

かし、それらは決して力強いわけではない。つまり、女君の自立した足などそもそも物語社会には存在しないのである。

「三、生き方としての「世づかぬ」では、これまでの分析をまとめ、宇治十帖という物語社会の基底にあるものとしての「世づかぬ」ことを論じる。

八の宮から始まり、大君・中君、そして浮舟へと継承される「世づかぬ」とは、「世」から離（き）れて生きていくことの困難さを物語る一方で、「世の常」に抗いながらも生きていくことの確立を物語るのである。宇治十帖とは、物語社会に生きる「世づかぬ」人々の様子や状態を語り、生き方としての「世づかぬ」ことを問い続けるのである。